

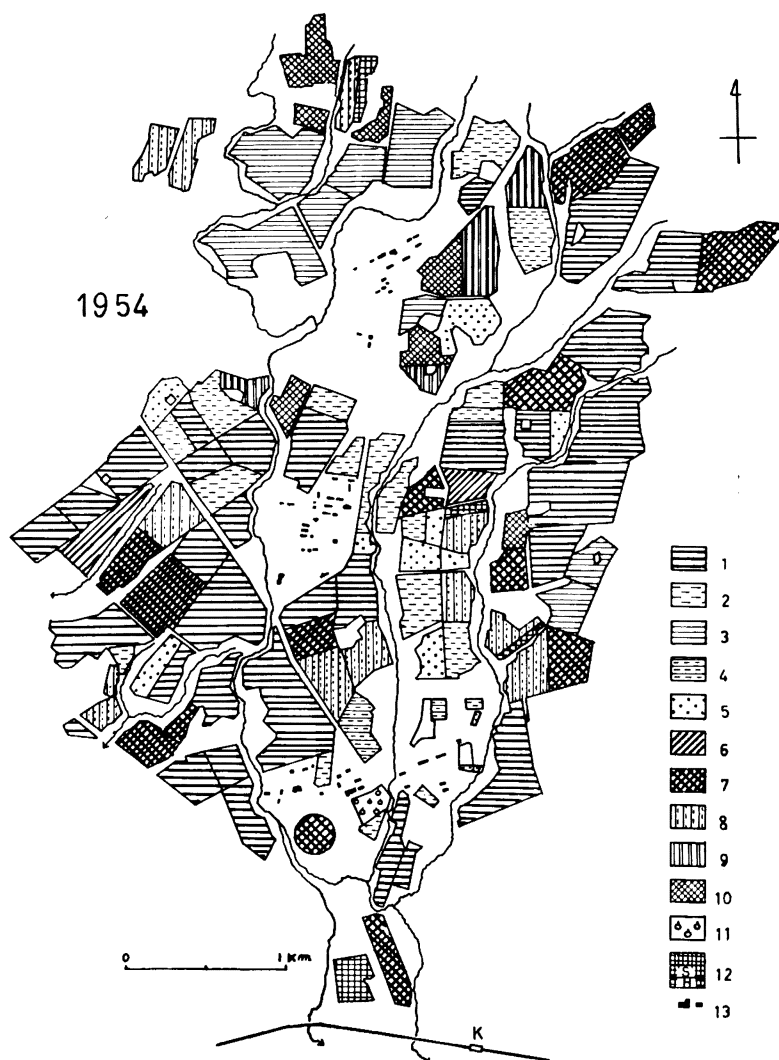
岩手県小岩井農場の戦後の変化

田 辺 健 一・堀 田 報 誠

序 小岩井農場は、岩手山麓雫石川の支流黒沢川および黒瀬川流域の小岩井泥流面(水野1960)上に位置し、岩手火山の火山灰および火山砂におかれ、海拔200mないし600mの波状地形のところである。上下2層のローム層があり、間に挟まれた約10cmの灰白色の火山砂層は固結している。上部ローム層は約1mで

あるが、斜面では流亡して10数cmの厚さに減じているところが多い。固結した火山砂層が不透水層となっているため、植物の生育は悪く、原野として広く残されていた。

1891年小野義直・岩崎弥之助・井上 勝の3氏が共同で開墾し、1899年岩崎久弥が牧畜農場としての基礎をかため、1938年小岩井農



第1図 土地利用図(1954年)

1. 乾牧草 2. 生牧草 3. 牛放牧 4. 羊放牧 5. 採種牧草・クローバー 6. 燕麦 7. トウモロコシ
観光用地, Hは種鶏用地) 13. おもな建物

牧株式会社となった。総面積 2,600ha のうち、1,800ha が赤松・唐松の植林地で、山林部として年々 7,000m³ の用材の生産を行ない、約 780ha が農用地とされ、種牛部・種鶏部・畜産部・乳業部・市乳販売部が経営され、さらに観光部がおかれている。従業員は約 250 名。

1958 年と 1969 年と 2 回調査を行なったところ、経営面で著しい変化が見出された。

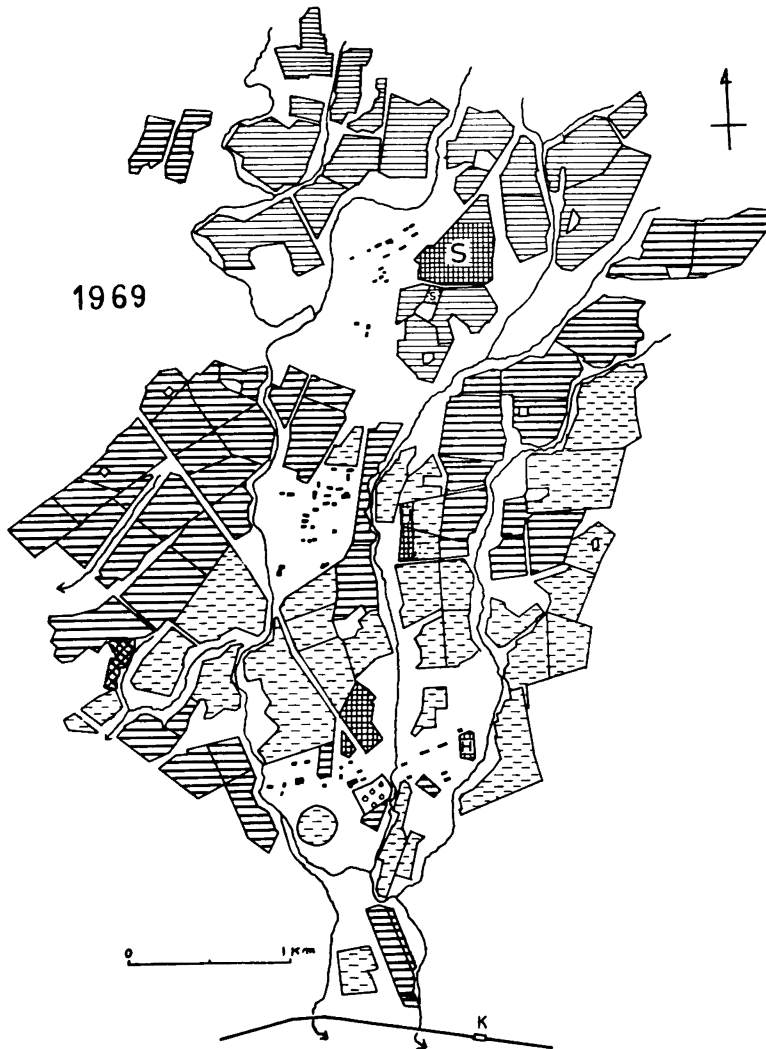
1954 年当時¹⁾の農場経営

玉蜀黍 (94.5 町)・大豆 (61 町)・燕麦牧草混播 (54.9 町)・青刈玉蜀黍 (28.3 町)・レープ (16.7 町)・燕麦 (13 町) などの自給飼料を中心とする

長期輪作の耕地が 286.2 町、乾牧草 360.2 町、生牧草 52.4 町、牛および羊の放牧地 57.7 町、その他を合わせて 766 町の農用地があり、裏作は燕青・蕎麦・緑肥大豆・ライ麦 など 57.0 町であった。

長期の輪作とは、耕地の位置と土壌条件によって異なるが、最も長いので牧草混播の 30 年の 1 圃場や乾牧草地の 25 年があり、概して牧草用は長く、短くとも 10~15 年である。玉蜀黍や燕麦は 5~10 年、大豆は 5 年程度である。

ホルスタインの種牛 201 頭、緬羊 133 頭、七面鳥 160 羽、鶏 1,400 羽、豚 31 頭を飼育し、乳牛 156 頭、役牛 31 頭、緬羊 75 頭を周辺の農



第 2 図 土地利用図 (1969 年)

8. 大豆 9. 小麦・大麦・ライ麦 10. 青刈大豆・青刈トウモロコシ 11. 果樹園 12. その他 (S は

1) 1958 年の調査の際に、1954, '55, '58 の 3 カ年の土地利用図と、各圃場の同一作付経過年数を得た。

家に貸付けていた。

1969年²⁾における農場経営

耕作部門として乾牧草 293.2ha と玉蜀黍 3.0ha と果樹園 2.7ha があり、畜産部門として放牧・乾牧草・サイレージ用地 228.1ha、育成馬放牧地 7.1ha、種牛部門として放牧地 216.3ha、種鶏用地 5ha、観光用地 11.8ha がある。

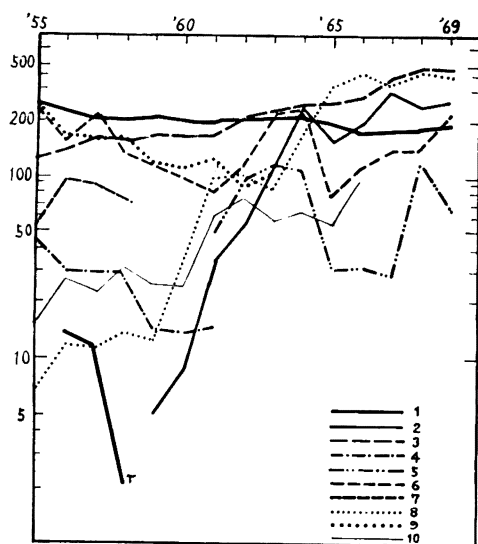
1954年に比べて作付作物の種類が全く少なくなり、牧草生産と放牧とが中心に変化した。

家畜の面では、ホルスタイン種牛 193 頭、乳牛 262 頭、肉牛 67 頭、緬羊 222 頭、鶏 36,872 羽を飼育し、他に 390 頭の乳牛を貸付けている。

1958年と比べると、七面鳥・豚・役牛が 0 となり、肉牛・乳牛が新しく増え、鶏が著増している。

変化の実態とその意味

上記のような変化は、1960年から1963年の間におこっているのであって、1960年の土地利用は当年1954当時のものと殆ど同じである。この間の変化を、家禽・家畜の飼養頭羽数・貸



第3図 家禽・家畜の飼養頭数・貸付頭数の累年変化

- | | | |
|---------|--------|---------|
| 1. 種牛 | 2. 乳牛 | 3. 貸付乳牛 |
| 4. 貸付役牛 | 5. 肉牛 | 6. 緬羊 |
| 7. 貸付緬羊 | 8. 種鶏 | 9. 七面鳥 |
| 10. 豚 | r 貸付種牛 | |

付頭数の累年変化グラフで、より詳細に検討してみよう。

ホルスタイン種牛の系統繁殖は、本農場の初期からの経営の中心で、岩手県内ばかりでなく、全国各地に古くから供給しており、1955年以降殆ど増減はないと言えよう。1969年3月末には種牡牛 7、基礎牝牛 95、育成牝牛 50、育成牡牛 30 が飼育されている。

牛乳および酪製品生産を目的とする牛乳の飼育は、1960年までは貸付が中心であったが、1963年から放牧による場内飼育が急速に増加しており、また農家への貸付頭数も著しく増えている。従って、市乳・酪製品の製造販売は急増した。

役肉牛は貸付を中心に行なわれていたが、1961年からは肉牛の場合飼育に転換した。

緬羊も本農場の中心であったが、1961年から貸付は中止し、1965年以降、肉用の緬羊に切りかえられた。

七面鳥の飼育は全国一の供給をほこっていたが、1964年にその飼育を止め、養豚も、僅かであったが、1967年に中止した。

一方、養鶏は種鶏の生産を早くから行なってきたが、1960年より拡張し、1961年には1万羽の種鶏が飼われ、七面鳥の飼育廃止から1966年には3.8万羽と急増した。1967年よりは外国系の種鶏に切りかえ、一時的に飼養羽数が減少したが、1969年3月現在では、卵用種鶏（スタークロス 288）：成鶏 13,300、雛鳥 6,800；肉用セミブロイラー種鶏：成鶏 9,700、雛鳥 3,500、ブロイラー専用種鶏：成鶏 3,400、雛鳥 3,700；総計 40,400 羽が飼育され、年間 200 万羽以上の初生雛を東日本一帯に販売している。鶏舎、育雛舎は1969年の土地利用図（第2図）の如く、3カ所に分散配置されている。

このような飼育家禽・家畜の飼育形態の変化および品種の変化は、日本の酪農業の将来のあり方をいち早く実現してみせたと評価しうる。

少なくとも、乳牛飼育だけについても、K. K. Oshiro (1963) の調査と比較してみれば、全国における一般酪農家の変化傾向より早いし、東北地方の酪農の動向より著しく早まった傾向を示している。すなわち、全国では1964年頃から多頭飼育の傾向があらわれてくるの

2) 1969年7月の調査で、1960, '68, '69の3カ年の土地利用図と、各圃場の同一作付経過年数を得た。

であるが、本農場の経営転換はそれよりはるかに早く、周辺農家の貸付乳牛の飼養頭数が増加したばかりでなく、放牧を中心とした飼育の比率が著しく高くなった。この飼育形態は、本農場経営の初期の形態にもどったようにみられるが、乳質の向上のほかに、乳価におよぼす飼料費の低下および労働力の減少をはかっているのであって、これが外国の乳製品に対抗しうる唯一の方向であり、牧畜農場の本筋であると思われる。

種牛・種鶏の経営は、上記の牛乳生産を目的とした乳牛飼育とは全く別で、民間経営の本農場の中心的意義を持ち、種牛育成販売については伝統的なものとなっているのであるが、種鶏の飼育については飼料を全部購入する点で問題があろう。もっとも、卵生産を目的とした大規模養鶏業の、全飼料購入という現在の日本での状態からみれば、種鶏生産ははるかに有利な経営であることは確かである。

従って、逆説的に言えば、優良牧草の生産と放牧とからする種牛の生産と、全く対称的に全飼料購入による種鶏生産とは、経営の主旨からいって同一視することができるが、一般に行なわれる卵生産の大規模養鶏業は、放牧を中心とする牛乳生産を目的とする乳牛飼育と同一視できないことを、経営の実態から示しているのであるかもしれない。

なお、貸付緬羊の中止、肉用種への転換と場内飼育、および養豚経営の中止、七面鳥飼育の廃止などは、古い牧育農場形態の残滓の切り捨てであって、本農場の思い切った合理化の一環である。

(1969. 11. 17 受理)

文 献

水野 裕 (1960) : 岩手火山周辺地域の地形発達

東北地理 12 71~76

Oshiro, Kenji K. (1968) : 東北地方の酪農業の

最近の動向 東北地理 20 136~141

Recent Changes in the Farm-management of "Koiwai-ranch", Iwate Prefecture

Ken-ichi TANABE and Hosei HOTTA

The Koiwai ranch, is on the mud-flow at the southern foot of Iwate Volcano. Since 1891, the ranch has supplied a number of milch cows to the farms in Tohoku, Kanto and Hokkaido, and its farm-management has been well known as one of the western style farms which are very few in Japan. Whole area of the farm is 2,600 ha, containing 1,800ha of the forest land.

In 1954, 201 bulls and excellent cows of Holstein breed for artificial breeding, 133 sheep, 160 turkeys and 1,400 hens were bred in this ranch, and 156 cows, 31 labour cattle and 75 sheep were rented to the surrounding farms. And also, several kinds of feed crops were grown on the cultivated land of about 286 ha, hay producing land became about 410 ha and pasture land for cows and sheep became 57 ha by 1960.

From 1960 to 1963, the above states changed and in 1969, 193 bulls and cows of Holstein breed, 262 cows excluding 390 cows rented for milkig, 67 beef cattle and 222 sheep for grazing were kept in this farm. An area of 293 ha was used for hay-producing, 216 ha for pasture and 228 ha for hay-producing and grazing.

These drastic changes of management of this ranch preceded the general changes of dairy farms in Japan.

This change of the management is one of the measures to develop the real dairy farming in Japan in the way as it is in Europe and America. However, there are very few farms in Japan that can make such a change following the example shown by Koiwai ranch.